

天声人語

1970年、横浜市で脳性まひのある2歳の女の子が母親に殺された。施設への入所を断られ、将来を悲観しての犯行とされた。母親の境遇を思いやる地域住民らが減刑を求めて運動を起す。しかし、これに異を唱えた人たちがいいた▼「母親を憎む気持ちは毛頭ない。だが罪は罪として裁いてほしい」。脳性まひの当事者らが思いを意見書で訴えた。切実な言葉が本紙に残る。「減刑になることは、僕たちの存在が、社会で殺してもいいということ」「かわいそうだから障害児を殺した方がいいという、そんな愛ならば、いらぬ」▼半世紀前の訴えを、男は想像すらできなかつたろう。相模原市の「津久井やまゆり園」で19人の命が奪われた。事件から、きょうで1年になる▼あまりにもむごく、異常な犯行だった。しかし今も答えが出ないのは、被告の男の思考そのものも異常だと片付けることができるのか、という問いではないか▼「彼は正気だった」。和光大名誉教授の最首悟さいしゆごさんが事件後にそう語っていた。「いまの日本社会の底には、生産能力のない者を社会の敵と見なす冷め切った風潮がある。この事件はその底流がボコツと表面に現れたもの」。障害のある娘と暮らすゆえの重い言葉である▼言語障害があるならあるまま、喋れるなら喋れるまま、お互いの存在を認め合う関係を――。あのとき声を上げた一人である故・横田弘さんが著書で述べている。問われているのは、当たり前前のことができるかどうかである。

2017・7・26